

水トラストニュース

2009.6 No.21



もくじ

町有林整備に関する協定書の更新調印式	1
木質資源利用ニュービジネス創出モデル 実証事業成果報告会の感想	2
御嵩 環境フェア	5
図書紹介「明るい食品偽装入門」	6
流域自給をつくる大豆畑トラスト10周年記念集会 in 名古屋	7
総会案内	9

町有林整備に関する協定書の更新調印式

2009年1月30日(金)午後1時より御嵩町役場において「市民ボランティアによる水源整備に関する協定書」が御嵩町と私たち「みたけ・500万人の木曽川水トラスト」との間で調印されました。

調印された協定書の内容は、ボランティアによる町有林整備活動により上下流住民の交流を図ることが目的であり、整備活動とは町有林の間伐や枝打ちなどをして森を保育すること、協定の期間はこれから3年間(2012年1月31日まで)毎月一回の作業をする、となっています。

当日は前夜10時に帰宅したという渡辺町長(なんでも著名経済人の会合が東京であり、そこで会った著名経済人はこの不景気は2、3年で必ず回復すると力強く語っていて、とても嬉しいとのこと。しかしねえー、100年に一度といわれている経済危機がそう簡単に回復できるのはとても思えないけど・・・)と、水トラストの由井代表がそれぞれ挨拶し調印されました。

その後、大沼さんにより私たちの活動がパワーポイントを使って紹介されました。「東京のOLさんが、わざわざ夜行バスに乗りこの活動に参加してくれています。彼女まだ20代ですが、インターネットでこの活動を知り、今では枝打ち作業のベテランとなっています」と大沼さんの説明。大写しにされた映像には、Fさんがヘルメットをかぶり高いはしごに登りノコギリを手にした姿。これには会場にいたおじさんたちの感嘆の声がもれ聞こえてきました。また、立会人として出席していた岐阜県加茂農林事務所の中島林業課長は「感動しました」と激賞していました。

こうして調印式は無事に終わったのですが、ちょっと気になるのが御嵩町長の発言です。というのも小和沢の産廃計画の跡地利用検討委員会がされている中、どのような結果が出されるのか町長の動向が大きく影響するからです。

先に書いたように「不景気が2、3年で回復するとの発言を聞いて嬉しい」発言で引っかかるのは、私たちがしている森林の保全作業や農業に関わる作業など、不景気だからこそできる施策を推進できるチャンスと考えて、必要不可欠な持続可能的町政をどうして実現しないのかと疑問に思ったからです。要するに町長って経済発展志向の人?ってことです。それとやはり町長の発言でもう一つ「極論は避けたい」です。この意味はバランスを取りたいということですから、町長ってバランス志向の人?ってことで、産廃反対の我々としては気になるところです。

とにかく、小和沢の跡地利用検討委員会でどういう結論が出るのか要注意であり、私たちが今後も引き続き御嵩町との関係を保つことも重要と思った次第です。

(早川)



木質資源利用ニュービジネス創出モデル 実証事業成果報告会の感想

水源の森でも町有林でも、我々は切り捨て間伐を行っています。間伐材を山にそのまま放置するやりかたです。将来の良材を育て、林床に陽の光を入れて生態系を豊かにし土壌流出を防ぐという観点からはこれで十分です。全国的にも、切捨て間伐はごく一般的に行われています。しかし、なんとももったいない。さらに、放置間伐材がやがて腐蝕して炭酸ガスになって空気中に戻れば、森林による温室効果抑制機能は伐り残された樹木の生長加速による炭酸ガス吸収分と相殺してチャラになってしまいます。そのため、なんとかならないだろうかという思いが続いてきました。一度、水源の森から恵那の木材市場へ4mに玉切りした用材を出荷したことがあります。無償の人力でおこなっても、輸送費の元が取れないというネガティブな結果に終わっています。

昨年後半から、市村さんが中心となって、間伐材の搬出と有効利用のための方策が検討され、可児市にある名古屋パルプ(現大王製紙)にパルプチップ材として買ってもらう話が進行しています。これまで伐倒したヒノキ材を2mに玉切りして、林道横に積み上げる作業も進んでいます。これをやると森の中がきれいになり、杉なりに積み重ねられた玉切り材の姿と合わせて、なかなか美しい風景となっています。しかし、課題はたくさんあります。最大の問題は、県道まででこぼこの林道をどうやって搬出するかで、耕運機とリヤカーの購入が検討されています。首尾よく県道まで搬出できたら、軽トラで小木曾さん宅の空き地まで運び、ここから名古屋パルプ委託のトラックが輸送するというスキームが描かれています。これらが全てうまくいったところで、費用的な実験結果が出てくるわけです。そこでもうまくいくかどうかはまだまだ不明です。

こうした状況にあるものですから、たまたま環境系MLで見つけた表題の報告会に出かけて見ました。林野庁の委託事業で、全国木材協同組合連合会が受注した事業のようで、全国12ヶ所でモデル実証事業が行われているとのことでした。その成果発表会が、東京、名古屋ともう1ヶ所、合計3ヶ所で行われたのですが、名古屋会場では4事業に限った報告が行われました。

会場は白鳥の国際会議場でした。大きな会議室に70人ほどの聴衆で、やや閑散とした印象です。報告したのは、王子木材緑化(王子製紙の子会社)、E2リパイプ(三重県大台町の土建屋さん)、キベス(和歌山県御坊市のベンチャービジネス)、フルハシEPO(名古屋の環境系総合企業でエステサロンまで経営している)の4社です。いずれも、フォワーダーとかグラップルというキャタピラーのついた搬出や持ち上げ積み込みなどのための大型機械を使っただけの作業でした。作業道整備にはコンボが活躍し、輸送は10トンの大型トラックです。これは場違いの所へ来てしまったかな・・・という後悔の念が沸きました。が、せっかく来たので最後まで聴く事にしました。

まずわかったのは、間伐材のうち良材は材木(用材)として出荷し、それはこの事業の勘定の外になること、伐倒から細い材や枝葉の搬出・出荷・何らかの利用をする全プロセスについて、林野庁が伐倒材1立方メートルあたり6500円の補助金を出すということでした。伐倒に対しても補助が行われるわけですから、用材としての出荷の方も有利になるので、勘定の外とはいっても、実質は外にはなりません。

実証事業らしく、伐倒、集材、搬出、玉切り、輸送のプロセスごとに生産性($m^3/人 \cdot 日$)を細かく表にし



て示したのは、王子木材緑化とフルハシEPOだけで、他の2社はとても実証事業と呼べるものではありませんでした。フルハシEPOも社長自らの発表でしたが、ずいぶん雑な計算で実証性を議論できるレベルではありませんでした。王子木材緑化は、要するに王子製紙が所有している700ヶ所19万haの社有林(40%が人工林)の一部(全国各地から5ヶ所、合計46.8ha)において実証事業を行ったということですから、自分の所の山を切るのに税金を使ったこととなります。

途中休憩では、会議場のレストランからコーヒーが届きました。これももちろん税金です。コーディネーターは全木連の指導役という人物で、おそらくは林野庁の天下り組でしょう。やれやれ、よってたかって税金のムダ使いかよ～と言いたくなる気分を抑えて、役に立ちそうな所に集中します。

王子木材緑化の鳥取県・江府山現場では、9haの45～55年生スギに対して、23%の定性間伐を6人で行った。伐倒と枝払い、玉切りはチェーンソー、あとは大型機械を使った。合計570m³をパルプ原木として出荷のために土場に積み上げるまでに(用材出荷なし)、合計作業時間は1085時間、1日9時間就業なので、生産性は4.7m³/人・日であった。日当は、伐倒、枝払い、玉切りが16000円、集材搬出は14000円。これで計算すると、人件費が5700円/m³。燃料代や保険料を加えた伐出費は8100円/m³、これに林道建設費3500円/m³、輸送費1650円/m³を足すと、チップ工場到着までの全費用は13250円/m³となった。これに補助金6500円を放り込めば、6750円/m³以上で売れば、事業はペイするということになる。(大型機械の減価償却が計算に入っていないように思うのだが・・・)

これらのファクターを我々の作業と比べてみましょう。伐倒・枝払いだけに限ると、生産性は8.0m³/人・日だそうですから、9haを伐倒するのに要したのは、570/8=71人・日になります。すなわち、1haを間伐するのに71/9=8人・日かかったこととなります。我々は、町有林において、年間11日間作業して、ほぼ1haの間伐を行っています。枝打ち要員を除けば、伐倒作業を行っているのは平均すれば5～6人でしょう。すなわち、50～60人・日で1haということになります。但し、我々の間伐強度は約30～40%ですから、もう少し生産性が良いかもしれません。作業時間も、正味は5時間程度です。それを加味して概算すると、我々の生産性は、プロの伐採夫の5分の1程度かなと考えて良いかもしれません。これは思ったより高い数値です。我々が町有林を引き受けた時の木亦さんの想定は、プロの8分の1程度の生産性ということでした。それから、名古屋パルプの引き取り価格がまだ決まっていますが、補助金ナシの工場渡しで13000円という数字は目安として使えるでしょう。輸送費を引けば工場渡し価格になると思うのですが、それが11600円/m³です。

実はこの計算は、現場が異なるとかなり違ってきます。工場渡し原価で、宮城県北郷(スギ・ヒノキの定性間伐)では8650円/m³、徳島県・引地(マツの列状間伐)では15600円/m³などと大きく違ってきます。北郷が安く上がったのは、林道建設費が420円/m³となったのが最大の理由です。

キベス社は、4つの林業会社及び森林組合から買い取った材料を輸送しチップとおが粉の製造・販売まで行っています。おが粉は畜産業への販売を想定して始めたのですが、蚊取り線香や活性炭の原料としての販路が広がりつつあるそうです。但し、樹皮には重金属成分などが含まれるために、皮むきを完全に行う必要があり、皮むき機(リングバーカー)とチップターの購入とメンテナンスに費用がかさむそうです。広川町森林組合は作業員の平均年齢が71歳で後継者もいないとか、三興林業(奈良県・十津川村)は作業員不足で夏場しか作業が出来ていないなどの話もありました。その結果、この事業で間伐した面積は、東濱植林(和歌山県)の2haと原見林業の34ha(ここは機械化が進んでいて、若い作業員がいたそうです)だけにとどまったそうですから、我々のボランティア事業とスケール的にはさして変わらないこととなります。単価や生産性についての報告は全くありませんでした。木材の購入価格も言いませんでした。補助金がどこに入ったのでしょうか？少なくとも山には行ってない感じでした。

E2リバイブ社は、「間伐材未利用材を有効利用した地域活性化システム実証事業」などというタイトルでしたが、具体的な数字が全く示されず、地域活性化の話も全くありませんでした(この事業のために作業員を4人雇ったというのが活性化だったか…?)。土建屋が役場と図って補助金稼ぎをただけのような印象です。役場が林道を造ってくれるという話もできましたから、町民の税金も食っていることとなります。

フルハシEPOは、豊田と新城の森林組合から根曲がり材(1.1mと2.2mの玉切り)を土場渡し3000円/m³で購入し、岡崎森林組合で製材して知多半島の自社工場に輸送して、パレットとチップを製造しました。製材くずもチップ原料になります。パレット製品化の際の歩留まりは47%。53%がチップに回ったこととなります。パレットの売価は42000円/m³、チップは12200円/m³だそうです。6500円の補助金は、山には行かずに山を出た後のプロセスだけにつき込まれて、しかもまだ赤字だったとの報告でした。ただし、パレット製造のための製材費が21000円/m³に対しては、「高すぎる」の声が出ていましたから、実際の所の裏話が本当はありそうでした。ただ、森林組合は良材は用材として出荷し、根曲がり材だけを3000円/m³で出荷できたのだから、良いのではないかという話も出ました。

というわけで、いろいろムカムカしながらもじっと我慢して4時間の報告会を聞きとおしました。林野庁の補助事業としては珍しいケースで、純然たる間伐補助事業のほうはたくさんあるという話も聞きました。来年は現在の緑の募金からの助成金も終了するので、そちらの方も調べてみなくては…などと考えながら、白鳥から我が家までの長い道を自転車を踏んで帰りました。(了)

(大沼 淳一)



石崎さん親子が山仕事に参加してくださいました。

御嵩 環境フェア

御嵩公民館の前は早くからにぎわっていた。公民館の2階のブースには間伐された木がいくす、プランター、となって展示されていて、形がよかった。私は前日に檜の枝を3cmくらいに切って、麻縄でむすんだ壁飾りにしたり、長い枝と小さい枝をつけて家族の雰囲気を持たせたり、鍵かけにしたりして飾って見本として置いてみた。ブースの場所がちょっと暗めで、目立たなく思えたり、テーブルに「工作無料 何でも作れます」と目立たなく知らせておいただけだったが、子供たちの目にはしっかり目立っていたらしい。

始まってからすぐ親子がやってきて、見本を見て、これと思うものをまねしながら、木を組み立てていくと結果はその子らしい飾りができていた。



それから5,6年生の女の子たちがやってきた。いすは6席満席。見本を見て、しばらく考えていると、セメダイン、麻縄がほしい、この長さの木に切って、と要求が多い。あちこち飛び回り、ちょっとやり方を教えると、その先は彼女たちの発想でどんどん見本と違うものができていく。動物園を作った子もいた。たくさんやってきて、順番待ちまでして来てくれた。そのうち材料がなくなってきた。それでもあるもので工夫して作品をつくっていく。みんな楽しそうで、真剣で時間を気にせず集中していた。周りのブースはどんどんたたまれて帰っていくのに、ここだけ残っていた。十数名が作った作品の写真をとったがどれも個性があった。名古屋の環境フェアでは子供たちが順番を待って何かすることはなかった。御嵩の人は自然を身近に感じている気がした。面白いといってくれたのがうれしかった。

一緒に時間をすごして、いい一日だった。人に(特に子供たちに)楽しみをあたえ自分も楽しんで時間がすぎていったとき、「ボランティア」ということばではない快感で終わることができることがわかった。「ボランティア」というと何かしてあげていると聞こえてしまうから。(桜 小枝)

「明るい食品偽装入門」 魚柄 仁之助 著 (出版: サンガ)

図書館の棚から妖しい光線出しまくりの本がありました。無視していたんですが、何回行っても目に飛び込んでくるので、ついに手に取り、開いたページが「ニセウイスキー」。薬用エチルアルコールとティーパック、カンロ飴、キャラメルで作るらしい、そこに図解があった。即カウンターへ、ええ借りましたとも。「ニセウイスキー」に魅せられて借りてはみたものの、実際に参考にし、試したのは「箱入りの吟醸娘」紙パック酒 1.8。私は一升瓶持って、みたけ物語というお酒を入れてもらっているの、このお酒に、宮澤さんちのお米で作った麴をもらったので、この麴約50g(スーパーで売っている甘酒用の乾燥麴なら 1/4袋)をほぐし、キリフキで水分を少々加え、ビニール袋に入れ、こたつ等で1日寝かしたものをパックか瓶に入れて、待つこと5~7日。偽装吟醸酒完成!!「吟醸酒などの酒ビンに注げば演出も完璧」だそうで。宮澤さんちの麴君は活発なので、2日目位から美味しく飲めたのであります。

(モヤシモンもどき、またの名を檜三郎)



水源の森にはえたクリ茸。

男は森の中で迷っていた。そこは大きな山脈のふもとにひろがる広大な森で、人里からは遠く離れていた。人の背の倍ほどの高さの木が空間を満たし、足元には膝から腰までの高さの草木が生い茂っていた。ただ、木の密度はそれほど高くなく先が見通せそうだった。足元の草木も歩くのにひどい妨げになることはなさそうだった。だから男は森をぬけられるだろうと思って森に入り、そして迷った。

男は止まらずに歩き続けた。体力にはまだ余裕があったが、精神的な余裕がなくなってきた。男の目は出口を必死に探していた。

ふと、男は一本の枯れ木に目をとめた。男は立ち止まった。その枯れ木を少し前に一度見たことがあるような気がしたのだ。それは人の背よりも少し高いぐらいの枯れ木

で、特別な特徴があるわけではなかったが、なぜか男の目には周りの風景から浮き出て見えた。その浮き出た感覚を、男はしばらくまえに一度感じ、そして今また感じていた。だから、木の細かい様子を覚えていたわけではないが、同じ木だと感じたのだ。同じ木だとしたら、ある方向にまっすぐ歩いているつもりでいたのに、元に戻ってしまったことになる。そんなことはないはずと打ち消して、男はすぐにまた歩き始めた。そしてしばらく歩いた後、男はまたその木を見つけた。間違いはなかった。同じところに戻ってきているのだ。

男は、その木から先ほどとは違う方向に向かって歩き始めた。その木のところに帰ることがないように、注意をして一定の方向に歩き続けた。しかし、しばらくして男はまた同じ木の前に立っていた。

男はそれを繰り返した。なんど向きを変えて歩き出しても、おおよそ一定の時間歩いたあと、同じ木の前に戻ってきた。男はその枯れ木を憎み始めた。この森を抜け出ることができないのはその木のために違いないと考えるようになった。

次にその木の前に立ったとき、男は体当たりをして木を倒した。すっかり枯れていた木はあっけなく地面に倒れた。それから男は森の中を迷い続けた。もう二度とあの枯れ木を目にすることはなかったが、あの枯れ木がなくなった森は、何の特徴も持たない完全に一樣な世界だった。連続的で際限のない時間が、それまでの周期的な時間にとって代わった。その中で、男は焦りではなく恐怖を感じ始めた。ひたすら単調な森の中では、歩みを止めることさえ許されないような気がした。

男はもう一度あの木を探し始めた。あの木でなくてもいい。一度見たことのある木を見つけない、そうしてもういちど切れ目のある時間の流れを取り戻したい。

そのような木を求めて男は歩き続けた。男はもはや森の出口を探してはいなかった。

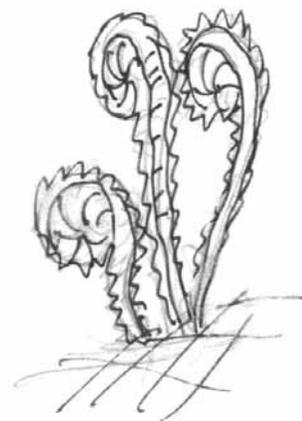
流域自給をつくる大豆畑トラスト10周年記念集会 in 名古屋

11月30日、愛知大学キャンパスを会場として、流域自給をつくる大豆畑トラスト10周年記念集会 in 名古屋が開催された。参加者は50名ほど、私の予想よりは少し少なめだった。記念講演は宇根豊さんで、演題は「いま時代は『農』へ向かう～労働ではなく仕事を、技術ではなく手入れを」。福岡県で農業改良普及員をしながら水田の減農薬運動を提唱。農民自身が虫見板を使って水田の昆虫調べをすることによって、田んぼ1枚ごとの虫たちの生息状況の違いを知り、水田ごとにきめ細かく必要最小限の農薬散布量を定めるやり方を開発。やがて、虫たちには益虫、害虫、普通の虫がいて、中でも普通の虫の割合が多く、田んぼで稲を育てることが同時にそういう虫たちを育てることにもなっていることに農民とともに気がつくにいたったという。植物もまたしかり、農民たちは水田とその周辺に生える植物の名前に詳しくなっていく。しかし、昔の百姓はその数倍の植物を識別していたという。

話しぶりはやわらかい。「百姓は米を作るとは言わない、田をつくるという。米は育つであり、なるであり、出来るである」「米を作るという発想は、米の収量、味など商品としての価値評価しからない方向へと流れていく」「ドイツのりんご栽培村で見聞したこと：都市から市民がやってきて、りんごジュースが飛ぶように売れている。理由は何か？おいしいからか・・・No！ 無農薬だからか？・・・No！ 正解は、これを買わないとこの村がなくなってしまうから」

この話、どこかで聞いたことがあるぞ・・・と思っていたら、宇根さんは佐賀の農民作家・山下惣一氏を師と仰いでいるとの話があって合点がいった。先月、長崎で開催されたアントロピー学会に基調講演者として招かれた山下惣一氏がこんなことを言っていた。「物には交換価値と使用価値がある。交換価値は景気や世界経済の動向とともに変動するが、使用価値は普遍である。農家が農産物を売って金にしようと思えばグローバルな変動に巻き込まれて食っていけないような事態になるが、自分で作った作物を自分で食べる分には世の中がどうなろうと関係ない。日本でうまくいくのは小規模農家であって、国が進めるような大規模農家ではない。日本の農家は専業だったためしがない。現金収入を得るためになにがしかの副業をやりつつ、自分で食べるものは自分で作ってきたのだ。農業の業という字はビジネスを意味するが、農という字はボランティアみたいな営みのことである。1銭の儲けにもならない作業がたくさんある、それが農的な風景を作り、里の環境を守ってきたのだ・・・」

大豆畑トラスト運動は全国各地にある。遺伝子組み換え大豆（作物）に反対し、安全な大豆を栽培する農家と消費者が収穫前に購入契約を結ぶことによって、生産者の安定を図り、凶作のリスクを消費者も担おうという運動である。各地のトラストが集まって全国集會も開催されている。この発想の視野を広げてゆけば、流域をステージとした地産地消運動につながる。それを実践して形にしたのが不運な交通事故で亡くなった由利厚子さんである。由利さんは、木曾川流域をバイオリージョン Bio-Region として位置づけ、流域内で





世界の山ちゃん(エスワイフード)の社員の方が家族づれで山仕事に参加してくださいました。

完結する循環経済の構築を目指して、流域内を行脚した。やがて流域内各地でこの発想に共鳴する生産者や消費者が現れ、「流域自給をつくる大豆畑トラスト」の誕生につながったのである。

それから10年、爆発的な拡大は無かったものの、確実に歩を刻み、自覚的な生産者と消費者のネットワークが機能しつつある。毎年数回の生産者消費者交流集会が開催される。特に生産者が集中する岐阜県白川町黒川集落では、地歌舞伎小屋「東座」を会場にして盛大なトラスト夏祭りが催される。夏はトウモロコシが、秋口には古くから東濃地方で栽培されて

いた福鉄砲という品種の枝豆が消費者の元に届けられる。この枝豆で私の故郷である仙台名物の「ずんだ餅」を作ると実にうまい。やがて正月明け頃に、大豆が届けられる。生産者の名前がついた豆である。我が家ではこれで味噌を仕込む。4キロの豆で仕込めば約15キロの味噌になる。3年物で食べるのだが味噌汁にダシは不要である。豆が残れば納豆を作る。

黒川集落の生産者のひとり、トラスト事務局を担う西尾さんはアイデアマンで次々と新しい事業を発案して実践している。はざ掛けトラストを立ち上げて、コンバインで脱穀までしてしまって石油の力で乾燥する主流のやり方でなく、稲束をハザにかけてゆっくりと乾燥する方法の復活の波を起こそうとしている。月に2回、名古屋の中心栄のオアシス21で開かれる土曜朝市(9時~11時ごろ)に農産物を並べている。売り切れるとさっさと帰ってしまうので、西尾さんに会いたいと思ったら早めに行かないといけな

い。八百津町の宮澤さんもトラストを支える中心メンバーだ。東京からIターンで入植して、養鶏を中心に、稲作、大豆、最近はお茶の栽培と出荷も始めた。我が家では宮澤茶を1年中飲んでい

る。宮澤さんは、木曾川水トラストの会員でもある。由利さんが始めた「暮らしを耕す会」が、トラストの名古屋事務局となっている。由利さんが亡くなった後、瀬口さんを中心に由利さんの志を継いで頑張っている。

私たち、木曾川水トラストは木曾川流域の上下流協働を目指すとしながら、このところ御高町の森林整備作業にほとんどのエネルギーを注入してきた。このへんで視野と行動圏を広げる必要がありそうである。その際に、大豆畑トラストの人々との相互交流はお互いを励まし、高めあうことにつながると思う。

(大沼 淳一)



2009 年度定期総会のご案内

時：6月27日（土）14：00～17：00

場所：名古屋働く人の家（地下鉄・伝馬町下車、徒歩6～7分）

議題：2008年度事業報告および決算報告

2009年度事業計画および予算報告

その他の報告

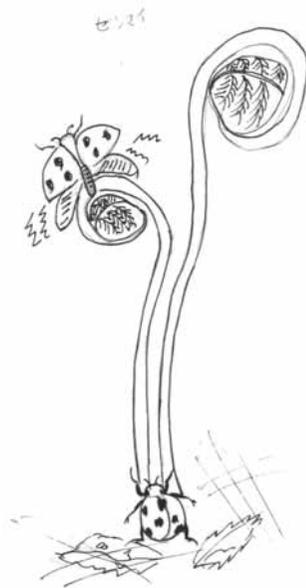
講演：「小さな農から見えるもの～木曾川中流の山村に暮らして～」

講師：宮澤杉郎

1949年、東京生まれ。

1989年に岐阜県八百津町潮見へ移住し、半農半Xのズボラ百姓暮らしを始める。山の乱開発をストップさせる市民運動に参加。現在、平飼い養鶏のほか、無農薬で米、野菜、大豆、茶などを栽培している。

「流域自給をつくる大豆畑トラスト」生産者。



気軽に、楽しく山仕事に参加しませんか

とき：毎月第2土曜日およびそれに続く日曜日

集合場所：御嵩町・中公民館（名鉄広見線・御嵩口下車、すぐ）

集合時間：午前10時（日曜日に日帰りの方も同じ時間に中公民館にお越し下さい）

参加の方法：電話、ファックス、電子メールなどで申し込んで下さい。

申し込み・お問い合わせ先：TEL 0574-64-0216(中村) FAX 052-779-4291 (大沼)

Email：mitake500npo@yahoo.co.jp

参加者の服装・持ち物：長袖、長ズボン、作業の出来る履き物、弁当、水筒

（宿泊出来る方は：寝袋、洗面セット、食器、ハシ）

宿泊先：ふれあいセンター（御嵩町上之郷字綱木）、日帰り参加も歓迎です

表紙の絵は早川しょうこ作
文中のイラストは市村加奈子作

発行

特定非営利活動法人 みたけ・500万人の木曾川水トラスト

〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬2-28-14 名古屋働く人の家気付

TEL&FAX 052-682-4737

郵便振替00800-9-64810

URL <http://homepage3.nifty.com/mitake/>

e-mail mitake500npo@yahoo.co.jp